

■ リチャード・フライシャー『その女を殺せ』（1952）

前号に続く3本目の作品は、昨年末の日本経済新聞の日曜日の紙面で、映画評論家の芝山幹郎氏（筆者にとって信頼できる映画評論家の一人）が取り上げた一作です。その見出しに「低予算B級映画のお手本 人を食った展開にニヤリ」とあります。まさにその通り、小気味良い展開に仕上がった佳作です。撮影日数13日、上映時間71分、スターの出演もなく撮影も手持ちカメラが列車内という閉ざされた空間の中で縦横に動きを止むことはありません。制作・配給はRKO、かのハワード・ヒューズがオーナーの会社で、芝山氏によれば、ヒューズは「この作品をことのほか好み、自身の映写室に保管し、色々と注文をつけた」そうで、「（主演のチャールズ・マグローとマリー・ウィンザーが絡む部分をロバート・ミッチャムとジェーン・ラッセルに差し替えて撮り直せ」と言ったとか。シカゴ発LA行きの特急列車（これが実にSLなのです）を舞台に、重要な裁判（マフィアと大企業との癒着・収賄事件）の証人女性をロス市警の刑事が護送するというストーリーであり、この女性の命を狙う殺し屋が現れての騒動になります。移動する列車の中でリチャード・フライシャー（1916~2006）、当時30代半ばの新進監督は様々な仕掛けを用いて意外な展開を仕掛けていきます。筆者などは完全に騙されてしまいました。後年のリチャード・フライシャーには見られない切れと演出プランが発揮され、おそらく本作がベストではないかと酷なようですが断言できます。リチャード・フライシャーといえば、長編ドキュメントでオスカーを獲得した経歴を持ち、『ミクロの決死圏』（1966）や『絞殺魔』（1968）『トラ・トラ・トラ!』（1970）『ソイレント・グリーン』（1973）などで知られますが、父マックス・フライシャー（1883~1972）は、「アニメーションの父」の一人として記憶される人物で、その業績は実写映像をトレースしてアニメーションを作成する「ロトスコープ」という技術の発明があります。これにより、アニメーションにおけるリアルで滑らかな動きが可能になりました。また、「ベティ・ブープ」を創造し、彼のスタジオでは「ポパイ」や「スーパーマン」のアニメーション化も手掛け、これらを世界的に人気のあるキャラクターに育て上げたという実績があります。

本作は製作から69年という長い歳月を経て、2021年に東京シネマヴェーラ渋谷で開催の「Men & The Guns」にて上映、その後2025年に「アメリカン・ギャング・ノワール映画祭」にて日本劇場初公開となりました。

さて、低予算B級映画の名作というと、バーバラ・ローデン（1932~1980）の製作・脚本・監督・主演作『WANDA/ ワンダ』（1970）を挙げることができるでしょう。本作のストーリーは、社会の片隅で目的もなく生きる女性が、流れに身を任せた結果、銀行強盗に巻き込まれていくというもので、主人公ワンダは、ペンシルベニア州のさびれた炭鉱町に住む、目的意識も将来の希望もない女性です。育児放棄から夫と子供たちを自ら手放し、家を出た彼女は、その日暮らしの生活を送ります。バーやモーテルを転々としながら、つかの間の宿や食事と引き換えに男性と関係を持ち放浪します。ある日、彼女はノーマン・デニスという小悪党の男と出会い、行動を共にするようになります。ノーマンは横暴な性格でしたが、行き場のないワンダは彼の言いなりになり、やがて彼の計画する銀行強盗に加担させられるという筋です。

幼い頃両親が離婚し、虐待も受けたらしいバーバラ・ローデンは16歳でニューヨークへ行き、モデル、ピンナップガール、ダンサーを経てアクターズ・スタジオで演技を学び、エリア・カザンの作品に出演。1966年には23歳年上のカザンと結婚するという波乱の人生を送りますが、癌のため48年という短い生涯を遂げます。銀行強盗の共犯として審理にかけられた女性の話を新聞で読んだバーバラ・ローデンは触発され脚本を手掛けます。しかし、「誰もこの女性がどんな人物か理解してくれなさそう」というので、115千ドルの制作資金を調達して撮影に臨みます。ローデン自身の姿をワンダに投影したことは確かでしょう。時あたかもアメリカン・ニューシネマの時代に突入した頃であり、リチャード・ブロディという映画評論家は、「（アメリカン・ニューシネマと言うより）むしろ、ジョン・カサヴェテスが行っていた即興の作品に近い」と評しますが、これは紛れもなくアメリカン・ニューシネマの台頭を飾る名作の一本であり、予測できない展開を見せ、リアリスティックで強力なインパクトを持つ作品です。決してフェミニズムの作品ではなく、むしろ旧弊な女性像、しかもドロップアウトした存在として描いたものです。自らの主体性を持たず、社会や男性に従属するしかない女性の姿を投影したもので、圧倒的な空虚さ、社会的居場所の欠如、自身の価値の否定といったネガティブな要素が固まり、捌け口を見出せない袋小路にある苦悩する女性の姿がここに見出せるのです。それは、捌け口を求めるエネルギーさえ奪われ、ただ漂流するしかない女性の虚無と言えるのではないのでしょうか。本作も『その女を殺せ』同様に日本での劇場公開に恵まれず、ようやく2022年に実現しました。1970年にヴェネツィア国際映画祭最優秀外国映画賞を受賞しながらも、本国アメリカでは黙殺されたせいでしょうか。